

---

# 馬鹿ですが何か？

祿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

馬鹿ですが何か？

### 【Zコード】

Z9262Z

### 【作者名】

祿

### 【あらすじ】

まつたりと生きてきたとある馬鹿と、それに比べてキチッと生きてきた男が、神の手違いで死んでしまう。  
かわりにインフィニットストラトスの世界に転生させられることがあります。  
おまけに変な能力も付けられていた。  
二人は、まつたりと生きて行けるのか？

唐突だけが俺は思い付いた。

命は一つであり、人間に前世や来世など”次の人生”はない。人は死んだら、そのまま人格や記憶など消えて無くなる。

前世来世、天国地獄、転生蘇生などは人間の都合のいい妄想や想像でしかない……けつぎょくは存在しないものだと。

「…………で、結局なにがいいたいんだ?」

「やだなあ、てっちゃん。もうわかつてるくせに」

はあ、とため息をつく友人を飛び越えて親友（仮）の佐久間哲<sup>さくま てつ</sup>、通称てっちゃんは、めんどくさそうな顔をしながら見てきた。  
まあ……あれだ。自己紹介しようとしますか。

「岡山祿<sup>おかやま ろく</sup> 17歳男 乙女座で誕生田は想像に任せるとして血液型はO型だ。よろしくな!」

「誰に自己紹介してんだよ……てかさつきのは何なんだよ」

「いやあ、バスの中つてひまじゃん?だから頭にポツと出てきたのがさつきなのだ。で、一度しかない人生を無駄にせず、しつかりと生きていてほしつて言いたいわけ」

「たまにいいとつぽこ」と言つよな

そんな雑談をしながら、つちやんの高校に向かって歩いてくる。  
「つちやん曰く、今日は文化祭なんだって、もう毎年のことでな  
にしてんだろうね？」

重役出勤とはなかなか偉くなつたんだな。

「お前はまつとへと寄り道するからな。その間に田が暮れる」

「へー、そりゃ大変だつたね？」

「お前のことだぞー？」

ぼてぼてと歩いていると、横断歩道のど真ん中に金色に光る円形の  
なにかが田に入った。

てつちやんは気づいてないみたいで、ペリペリ何かを喋つている。

「（）のまま気づかれないように確認して、500円玉だったら即  
回収（）」

「（）にしつ絶対聞いてないな…今度は何を考えてるのや（）

金色に光る円形のなにかの横を通り過ぎるとまた横田で確認。  
それは期待していた通りの500円玉だった。  
車がこないのを確認して、すぐにしゃがみ込む。

「みどり危ない！」

「へ？」

横断歩道を渡つたところにいたてつちゃんが、すぐ焦つた顔をしていた。

右側がやたら騒々しくて、見てみるとトラックがこちらに突っ込んできていた。

避けようにも距離は25メートルくらいで、スピードも速くて、とてもじやないけど避けられない。

「……まじか？」

「ん？ 待てみどり。なぜ俺を掴む？」

「てつちゃんシールドー！ がぐ！」

「ぶるうわー！」

あえなくトラックと正面衝突。もちろん俺とてつちゃんは即死。

一度きりの人生をどうのこうの言つてた奴が友人というより、悪友に近いやつを道連れにするのは割と愉快（笑）

……………い……………か

「……………」

おれ……………か……………の……………バカ…

「……………（こいつら）」

「おきんかー！」の馬鹿者ー」

「ううせえな……………人が気持ち良くなっているのに耳元で騒ぐなよ、糞豚。  
殺されたくないなら黙つていろ屑。食い殺すぞー。」

「……………（うるうる）」

「み、みどり？少し落ち着けよ、な？」

聞き覚えのある声がしたので、そつちに目を向けると悪友でいたりも  
んがたつていた。

「あれ？おかしいな……てつちゃんは俺が殺したはずなんだけど、  
何で元気に立つてんの？」

「やつこえばお前……………俺を道連れにしてくれたよな？」

「記憶にないな。改ざんされたかも」

「あー。そのことなんじゃが……あれはわしのせいなのじや」

口調に似合わないような容姿をしている女性（仮）は、申し訳なさそうに罪を自己宣告してきた。

よく見るとセミロングの黒髪で小柄、モロ好みに当たる。

「あなたのせいってビリーハーことですか？」

「ちと手違いでトラックをお主に確實にぶつかる距離に置いてしまつてのう……まさか友人を盾に使う鬼畜な奴だとは思つておらんかつたがな」

「だよねー、ちゃんと車がこないのを確認したのにトラックが來たのは不思議だつたからね」

「こん畜生……一度きりの人生をどうのこうのって語つたあとなのに無駄死にじやないか。

てかこの人は何物？ 果物？ たべていいのかい？

「食べれないから落ち着けみどり。話が進まない

「わしは神じや。まああれじや、お主達を転生せしむ」としか償えんがいいかの？」

「まあ生き返れるなら俺はいいですけど

「（「転生へ…せりあがれ」を預定したばかりなのに実在するところ新事実……  
これは新たに新みどり理論を考えなきや）」

新みどり理論を考えている間も、話し合いは進んで行った。  
交渉とかはてつちゃんにいつも任せきりなので、けつこうの信頼して  
る。

いろいろ質問されたけど、できとうに返事しといた。

「それじゃあ、転生させるんかい。準備はよいか？」

「はい」

「元の世界だよね？」

「いいや」

「え？」

てつちゃんの返答に驚いていると足元が光始めた。  
てつちゃんに視線を戻すと、やりきったつて顔で教えてくれた。

「俺達がこくのはインフィニットストラトス……ISの世界だ」

「まてまてーそれは俺がまつたりできないといつ最悪のフラグが立  
つてしまつじやないか！」

神（仮）とてつちゃんは微笑んでゆっくつと口を開いた。

「「どんまい」」

「「うぬせええ！転生中止！やめい！」

必死の抵抗はむなしく、光に飲み込まれた。

二人を転生させた神は一人の立っていたところを見つめてたたずんでいた。  
そして自分の体を抱き、身震いすると顔を紅潮させてうつとりとした。

「.....ふふふ。みどり...か」

神はスウッと姿を消した。

次の瞬間にその空間は割れて無くなつた。

## 1 「ことひじゅこせー」

俺は考えた。

前回、おつひよこひよいな神様に祿理論をひっくり返されたので、新しい祿理論が必要になったからだ。

今回は絶対ひっくり返されることがないよひしなきやいけない…

…俺のプライドがやうしなきやこけなについて叫びてる。

「…………」

「…………あのう……岡山くん? 田口紹介してくれない?」

「あつ、せー

いつね。

小学校の入学して一回だつけっ出席番号迷ってだるいねー、ほんとにめんどくせんな。

「あつはー。ありがとうございます。お腹減つてしまふので食べ物は給食のときしかでないよ?」

わかつてゐるつづり。

ちなみに俺は岡山家に生まれて名前はみどりだつた。

前世（？）と変わつてないのであんまり嬉しくないが、前世（？）の岡山家よりだいぶ自由度が高いからお気に入りだ。てつちゃんの方も前世（？）と変わってない。

「佐久間哲です。よろしく」

「ね？変わつてないでしょ？なんの面白みもない第一の人生だわ。そういうしてゐ内に授業が終わつた。」

「みどり、やつぱりあれと同じクラスになつたな」

「あーあれね。まあいいんじやないか？俺的にはほのぼの生活に水を差されない限り何かしようとは思わないよ」

「お前らしげつちやらしいな」

それから何ヶ月かたつたある日、いじめといつもの生まれて初めて生で見た。

割と愉快なものではなく不愉快極まりないもので、幻滅した。

「おい。おとこ女は一人で掃除しろよ」

「やうだぞ。この汚い机と教科書もなーギヤハハハハ」

ポニー・テールの子を複数の男子が囮んで、その子の机を倒して教科書をぶちまけて踏みにじっていた。

机にも落書きしてあり、いままぐにぶん殴つてやりたいが、てっちやんに羽交い締めにされて動けない。

「おい、何羽交い締めにしてくれてんだよ」

「落ち着け、まずは落ち着け。最初は言葉からにしよう、いきなり暴力はまずい」

「仕方ないなあ」

「おい、何だよお前」

「あー、こいつは確かに女みたいな名前のやつだぜ？確かにみどりっていつたよな？」

「みどりちゃんとかおんな男だ！ハハハハハ」

ぶち

「お前「何してんだ！大人数でよつてたかって…」……ち

一夏登場で怒りゲージが一周回って安定ラインギリギリで止まった。  
別に台詞遮られても怒ったわけじゃないし！

「なんだよーお前、このおとこ女とおんな男の味方すんのかよー。」

「俺はお前達みたいに仲間が多くないとそういうこと出来ない奴が大嫌いなんだ！」

「なんだとー？」「のー！」

一人の男子が一夏に殴り掛けた瞬間に、俺はそいつの腹を思いつきり殴つた。

泣きべそかきながらうずくまる馬鹿ーをほつとき、次々と殴り掛けつてくる馬鹿複数をてつちゃんと蹴散らしていく。

「てつちゃん。相手は大人數だから急所をついてけ、幸い全員男だからな」

「まあ、まともにやつたら面倒だし、手間かかるもんな

途中から一夏と笄（途中で気づいた）が参戦してくれたので、だいぶ楽に片付いた。

で、意外だったのが一夏と笄のコンビネーションが良かつたのは何となくわかつてたからいいんだけど、一人とも強いね。

「ありがとうな、助けてくれて」

「「こえこえびつもびつも」」

「「せり、簞もお礼言えよ」」

「あ、ありが…どつ」

「「こえこえびつもびつも」」

同じことを繰り返し使つ。  
けつじう楽しいもんだ。

「岡山も佐久間も強いなーどこか道場とか行つてゐるのか?」

「俺は我流かな。あとみどりでいいよ」

「俺は「マイツの技の実験台にされることがあるからな。それで身についた、あと「てつちゃんでいい」……おや?」

「へー、みどりもてつちゃんも凄いんだなー簞も俺もけつじう強いんだぜ」

「わつきの見たらわかるよ」

帰り道が何故か大半一緒だったので歩きながらしゃべる。  
さつきの男子は今頃職員室でお説教だ。

愉快愉快！

「…………」

「ん？みどりどうした？」

「あー一夏、みどりは時々きなり者え事する」とがあるんだ。気  
にするな

「なぜいきなりなんだ？哲」

「なんとかしらんけど、ふと氣づくことがあるんじゃないか？」

「へー苦労してんな」

そのまま家に帰り着くまで考え事は続いた。

考え方の内容はプールサイドに豆腐を並べるにはどのくらいの量の  
豆腐が必要か、ということも下らないものだった。

それから幾年が立ち、高校入試の前日。

「時間進むの速いな。ありえないな。読者のみなさんにあやまれ馬鹿」

「何いつてんのや！」

俺は受験勉強から逃げだし、海岸を散歩している。

鈴の帰国やらあつたけど、いい一年だったと個人的には思っている。ぽけーっと海を見ていると沖の方にプカプカと浮かぶ人型のものがあつた。

「ねえ……てつちゃん」

「なんだ？」

「あれって人じゃないよね？木か何かだよね？」

「んー……人じゃないと信じたいけど、どうみても人なんだよな」

「「…………」」

しばらく沈黙。……あまりの出来事に頭がついていかなかつた。  
今は2月、海水浴を楽しむような季節じゃないし、見た感じサーフボードを持っていない。

おまけに沖の方にどんどん流れされていつてる気がする。

「……まあいー！」

ハツと我に帰り、海に猛ダッシュする。  
なりふり構つていられなくなるときつてあるよね？

「おーー！みどりお前泳げないだろー！」

「水面を走ればいい！いくぞ…瞬足！」

水面を沈む前に蹴り、前に進んでいく。  
てっちゃんからは人の形をした人じやない物を見るような目で見ら  
れてる気がする。

緊急事態なら人は限界を超えられるんだ。

「よつとー！」

浮かんでいた人をつまみ具合に抱き、浜に戻つていく。  
しかし足に限界が来たみたいで、どんどん重くなつていつて浜に無  
事たどり着くのが難しくなつた。  
ので、奥の手を使つことに

「佐久間哲一受け取れえええええ！」

「うおおおおーー。」

ドスン

「危ねえなー人を投げるんじゃないー俺がキャッチしなかつたらどうなつてたか……ん?みどり?……あれ?」

バシャバシャ

「……むひ

「何で濡れてんの?」

「足に限界が来て、海にじぽん」

「なるほど、なら早く帰るぞ。ていうかこの子がうすんだ?」

てつちゃんが意識のないやたら見たことがあるような無ごよつな感じの女の子を指差した。

この時期に海に入つてたんだから、俺より危険な状態なんだろ。

「迷つてるヒマはないね。ここからだと俺の家が近いから俺が連れて帰る」

「大丈夫か?」

「なんとかなるだろ」

俺は女の子を背負って、家に向かって走り出した。家の前にくると、てつちゃんが前に出て両手を下に組む。

俺は靴を脱いでその手を踏み台に2階の自分の部屋の窓のところまで飛び。

ジャンプする瞬間にてつちゃんが手を上に上げてくれたので、だいぶ滞空時間が稼げた。

蹴りで窓を開けてなかに転がり込むと同時に暖房を付けて、身ぐるみ剥がしへッドの中にぼうり込んで掛け布団をかける。

「ふう……あとはあいつの回収だ」

部屋を出て、階段を下りて玄関のドアを開けると、俺が脱いだ靴を持つて待っていた。

なぜかおまけにもう一人女の子を担いで……。

「…………助けてくれ

「…………入れ

解説しよう。

てつちゃんは女子が苦手で滅多なことが無い限り、自分から女子に触れようとは絶対にしないが、恋愛対象になるのは女なのだ。本人もなかなか悩んでいるがどうしようもないでほつといてる。

「でだ、なぜにお前の部屋に入った瞬間に田に入るのが、ベッドで寝てる子が着てた服なんだ?」

「濡れたままじゃ気持ち悪いと思つて……大丈夫、下着姿は見てない。見ないようにしたから」

「身体能力全開でいったのか……まあ妥当だろうな」

「そういうながら坦いでた子を俺がひいた布団に寝かせた。冷や汗かいていたのは気にしない方がいいだろつ。」

「田が覚めるまで何も出来ないな」

「覚められても困るけどねー」

「なんでだ?……つと、そうだったな」

俺は立ち上がり、母さんのところにいつて事情を話すと、嬉しそうに猫と犬のパジャマを持って俺の部屋にいった。

誰に着せようとしていたのか甚だ疑問であるが、とにかく第1の危険は去つた。

「ふふふ、似合つてよかつたわ～」

「もつ着せたんだ。はやいね」

いつもはすべての行動が遅いくせに

「可愛い子連れて来たわね。彼女さん？」

「事情説明したよね！？どうやつたらやつなるのやつ！？」

『あらあら～』といいながらキッキンに戻つていつた母さんの背中を見る限り、完全に勘違いしている。

「（ひつかし、海の子……ど）かで見たような……」（へ、転生直前かそれ以降に……なんだっけ？）

考え事しながら部屋に戻ると、カッターが俺の頬を震めて通過した。飛んできた方向を見てみると、必死に説明しててつちゃんと凄い眼光で睨んでくるてつちゃんの想いでいた女の子がいた。

「ぶつちやけた話。その体勢は勘違こられるよ？」「助けるよー普通に助けるよー」

キッと睨んでくる女の子の前に正座する。もちろん手はみじかにあった紐でくくつとく。すると警戒を少し緩めてくれた。

俺だけ

「なあ……何も解決してないよつに思えるの俺だけ?」

「あの、岡山みどりです。あなたは?」

「……江藤あつす。お前達は何者だ」

「漬け物、果物、くせ者、悪者、馬鹿者、生もの」

俺の返答が気に入らなかつたらしく、てつちゃんを簫巻きにしてから俺を押し倒してカツターを首に付けられた。  
なんだか……心の奥から浮き上がりつくるこの感情は何なのか知りたい。

「馬鹿にしてるの? ちやんと答へないと殺す」

「ははは、やれるものならどうぞ?」

そういうながら自家製クラッカーをあつすとやらの田の前でならした。

白い煙りが彼女の顔目掛けて吹き出し、視界を殺した。

その隙にありすの手からカツターを取り上げて、手に巻いといった紐で拘束して床に捩じ伏せる。

「ああ、何で氣を失つてたのか教えてもらひつかー！」

「……へー」

悔しそうな顔をしながらひいらを覗むのをやめないありすに何だか申し訳なくなつてきた。

てつちゃんに助けを求めて視線をやるとい、『お前に任せたー。』と言ひ足そつな顔をしていた。

「えつどじめん。とにかく抵抗はやめよっ別にじつて食おつなんて思つてないか？」

「…………」

「まああれだ。今から質問するからあつてたら頷いて、間違つてたら横にふつて。じゃないとパソコンをぶちまける」

「…………（口ク）」

「今あらすは追われてこる

「…………（口ク）

「…………そこから裏の世界の者だ」

「あらすはそこから一人でやつてもくつちだ」

「…………（口ク）」

「（ノクノク）」

「正直お前は馬鹿だ」

（ブンブン）

大体の事情はわかつた。

あとにとひかるかた」と、口の辺に安全な所なんであるれにたいし  
あひ、あつた！

1番安全で1番強一人が

「てつちゃん一夏に連絡だ！」——233

「了解！」

紐をほどいてやつたらすぐに携帯を取り出して、いろいろあの人についてくれるよつに手配している。

ありすは顔を真っ青にして、暴れだしたのでキニッとした勝て持たえておく。

顔が真っ赤になつた氣がするけどコイツのためだ。

「はなせー！」のー。」

「落ち着きなよ、君一人じゃ絶対にそういう人達には敵わない」

「やつてみなければわからないだろ？！離して！」

「もう……安全な場所で普通の女の子として暮らしてほしいから、あの学園に入れてもうれるよ！」に頼んだのに……」

「…あの学園つて？」

「HIS学園。エリートの集まりさ、そこに友人の姉が教員やつてつて、とあるウサミミに聞いたから行けるはずだよ？あ、友人の姉つて元世界一なんだよ」

ありすは俺の話を『ありえない』みたいな顔をして聞いていたので、そのままの体勢でイロイロ話してあげた。

ウサミミつて単語が出るたびにピクッてなつて、その人について質問していくから、ありすという人間が少しわかつた。

## 2 「わんもあっぷー♪」

割と題名にある名前のある曲がある気がするし、誰か作ってくれないかなと思つてたりする。

元気で明るい曲になつたらいいなつていつ願望。しかし、それだけではないのが現実です。

「……（ぱくぱく）」

「……（もぐもぐ）」

田の前の担ぎ込んだ少女二人は、よほどお腹が減つていたのだろうガツガツと食事を食べていた。

母さんも何だか嬉しそうな顔しながらドンドンと食事を運んでくる。

「……ねえ。どうしてこの家の食事はこんなに美味しいの？」

「それはねえ。みじくんが強運の持ち主でお金ががっぽがっぽ入るのよ。だから高級食材を使つてるの」

「へえ……あんたに取り柄があつたのね  
俺は割とスペック高いんだぞ」

「そりいえば佐久間つて人どこにつたの？」

「家に帰つたよ」

少し驚いた顔をしてこちらを見るポーテのあります。  
どうやら俺とあこつは従兄弟か兄弟だと想つていたらしく。

「で、海で浮かんでた君は死んだの？」

「わしか？」

「わしあお主らの後を追つてきたのじや。なかなか面白がった

のでな、体も人間と全く同じこしてるから問題ないぞー」

……まさかね。

あつすの隣の女子に体を近づけて、小声で話しかける。

（……まさか、おつちよーじゅうよーこの自称神様？）

（なつ無礼者ー！わしあ正真正銘の神様じやー！みじつよ、こいつになつたら信じるのじや？）

（まさか追つかけてくるとは、たずが落ちじまされ。尊敬するよ）

（うぬぬー言ひてほなうぬーことを聞こおつたな……神の力思い知る

がいい)

(俺の勘で言つて、今のお前は治癒へりこしかできなこ)

(「ハーハー」)

悔しそうな顔をしながら料理を頬張つていく。  
頬つぺたが膨らんでリストみたいで可憐かつたが、なぜかあります睨  
まれてこるので気がついた。

「えつと…なに?」

「何でもないわ。それでこのナメ向て言つた罰なの~仲良さうだ  
し、知つてゐるんでしょ」

「実は知らない

「なんと~」

神様が驚いたような声をあげて、身を乗り出しつづけた。  
すかせやおでこにパンツをパンツして椅子に座らせた。

「ぬおお……みどりよ、お主の体は強化してあるからパンツでも  
痛こじゅく

「くふ、初耳だ」

「ちなみに身体能力も上げてあるのじゃ」

「ほい」

「わしのことは敬意を持つて、そりじゃな……恋とよべ」

「わかった、恋つてよぶ」

「人の話きこておったのか？まあそれでもいいが」

ほむほむとグラタンを食べていく恋は、ありすに一瞥してから少しニヤリと笑った。

何考えてるのかよくわからない、まったく面白ないだから俺達を殺して転生させたな……。

プルルルルポロロロ

「おつと失礼」

一夏から電話がきたので立ち上がり、場所を移動する。

「はい」

『みどり、一応千冬姉には言つてみたら『出来ることはない、普通に受験して入れ』ってさ』

「果てしなくケチだな」

『でもなんで千冬姉なんだ？ ELS 学園ならその教員に頼めばいいのに』

「さあね、うーん。まあ妥当だろうね、仕方ない正攻法で行くかな。  
ありがとうな一夏」

『ああ』

電話を切り、ポケットからある紙を取り出した。

その紙に ELS 学園と記入し、もつ一度ポケットにしまった。

「へへへ、千冬さん…俺の正攻法は他の奴とは違うよ?」

満月の夜に一人、庭に立ち悪い笑みを浮かべながら、家のなかに入つた。

次の日、朝早くに家を出て学校へ猛ダッシュした。

基本朝早く学校に行くが、それより早い、人に捕まえられたくないのと遅刻防止だ。

ちなみに9年連続皆勤賞狙つております。

今日は調子がいいでござります。…な・の・に！

「ふふふ……（＝＝＝＝）」

「…………む」

目の前にいるセミロングの活潑そうな身長150cmの娘のせいで、教室に行けない。

普通なら身体能力を駆使して向かうといろだが、下駄箱の前に立たれると履き返れないので膠着状態。試験？そんなもんもう終わつたわ。

### 回想

「多田的ホールって広いよな、ありす大丈夫かな」

「ああ、迷子になるわけだ……次の扉を開けて人に聞くぞ」

「「賛成」」

ありすと恋と別れて、試験場に向かっている内に迷子になつ、俺とてつちゃんと一夏はフラフラしていた。

そうしてゐうちに一夏が扉を見つけて開けて中に入る。

「うーん。誰もいないよ？」

「あれ？これってEISじゃないか？」

「（まことに、あれに触れたらEIS学園行きか）」

「ヒツヂヤンビツト?」

俺はてつちゃんが険しい顔をしていたので、近くにあつた灰色のものによつ掛かりながら、声をかけた。  
すると背中の方が明るくなつたと思えば、黒い服を着た人達が数人入つてきた。

「君達ここでなにしてるの!/?関係者立入禁止よ!」

「えつエスガ男に反応してゐる……」

「今すぐ上に連絡を!」

まずいことになつた。

すっかり忘れてた……あれだ、ほらよくあるじやんつーひこひーと。

「おこ、みぢり……厄介な」としてくれたじゃないか

「ビツなるんだ?俺達」

「あねえ……わいばー。」

「「あつー汚ねえ」」

一夏を踏み台にして女人の頭の上を飛び越えて廊下に飛び出す。そして出口に向かつて走った。

「までー。」

「待てといわれて待つ馬鹿はいませんー。」

「いりなれば実力行使だ！」

「追いつけるものなら追いついてみなー。」

回想終了

とこうわけで学校に逃げて来たわけだ。

そしたらマム娘が下駄箱の前に立つていて、それを物影に隠れて見物してるという状況が出来たわけです。

「（）（）であいつを味方につけられたら、割と戦力になるんじゃないか？」

「……みどり大丈夫かな？」

「（ん？）」

「あいつ行き当たりばつ当たりだから多田的ホールでやらかしてなきやいいんだけど」

「なんて失礼な！」

「えつー…？」

ミーマム娘はいるはずもない人の声を聞いて驚いた顔をして振り向いた。

「普通受かってるといいなとがじやないのー!？」

「ていうかあんた受験はー?」

「あんまり思い出したくない」

いろいろやじかしてきたからね。  
今は追われる身です。

「まつたく……あなたはいく先々で問題起こすわね」

「まあね。それで何してんの?」

「えつーあ、その…な、なんでもいいでしょー。」

「まあね…」

ふと、後ろを見ると黒い服を着た人達が出口を封鎖していた。皆さんの田を見るかぎり、怒ってるようでいらっしゃいます。

「我々ここで来ておうがつか」

「ちよ、みじり向して来たの?」

「えつと、HIS触つてきた」

「えええ…

じわじわと逃げ道を潰されて距離を詰められてきた。  
後ろのミミマム娘もさすがに怖いりしく、袖を掴んできた。

「……うーん。目的は俺だからお前は危害加えられないと想つんだ  
けど」

「そ、それでも怖いものは怖いの一!わ、わるい!…?」

「いえ別に」

完全に囲まれた状態で何かできないわけで、ボーッと黒服を見ていると近寄って来なくなつた。

すると黒服の後ろから一夏の姉の千冬が出てきた。

「みどり……お前何してん?」

「身の危険を感じて逃亡」

「一夏と佐久間はあの後、エリに触れて使えることがわかつた。い  
ますぐはどういひできるわけじやないから家に帰した」

「な、なんだと…それじやああそこで大人しくしてたまつがよかつ  
たんじや」

「当たり前だ馬鹿者ー。」

ゴシ

ビセツ

「つれてけ

げんこつで悶絶している時に担がれて運び出される。  
これはこれで誘拐されてるみたいで心が躍る。

「お前もだ」

「えつ、あたしもですか?」

「ついて来い」

車に乗らされたら、隣にマーメイド娘が乗ってきた。

「これはタクシーではないのですが何考えてんだらうね。」

「あんたの巻き添こみ」

「へー、そりや大変だね」

「おや? 拳を握りしめて震えておるではないか、怖いのかね?」

仕方ない手を繋いでやるか……巻き添いにしたんだからこれくらいはしてあげないと、置きざりにした一夏とてつちゃんに怒られる。

「ああ

「えつ」

「俺がいるから怖くないよ?」

「なにその理由。すぐ説得力があるけどおかしいわよ?」

「すまないな、怖がらせて」

助手席の千冬がこちらを向いて話しかけてきた。

そう思うなら、左隣りに座つてゐる人の警戒の眼差しをやめさせても  
られないだろうか?

プレッシャーがすごいのですが……。

「い、いえ。大丈夫です」

「みどり。お前が逃げなければ、お前の彼女も怖い目に会わすにすんだんだぞ」

「か…彼女…／＼」

「すいません……でも彼女ではないですよ。」の「ママ娘」と俺は

「なんですかー？」

いきなり隣の「ママ娘が怒り狂え始めた。  
これは危険色だ。

「誰が…ママ娘まだ成長期来てないのよー。」

「成長期来てて、それだと末期だよね？」

「くうー見てなさいよー高校卒業する時にはナイスバーティになつてやるんだからー！」

「ほいほい。特に期待しないで待つてるよ

「ついたぞ」

車から降りて、広い部屋に案内された。

そこにはエリが一台とウサギの「ネコ」が一つずつ置いてあった。

「れでなにするのかな？」

「……」

千尋はウサギミミが突き出している壁を思いつ切り殴りつけた。  
するとセレナからエリックと人が出てきた。

「こつたああい・ひーちゃんひどーー」

「それではみどつ。HSに触れろ」

「あいよー」

核ミサイルの発射ボタンを軽く押すノリでポンッと触ると、HS  
が光だした。

するとHSの中に吸い込まれるような感覚と同時に意識が遠くなっ  
ていった。

「……んー」

気がつくと俺は地面はコンクリ、空は雲で隠れている殺風景などころに立っていた。

後ろに気配を感じて振り向くと、ボロボロのワンピースを着た小さい女の子がたつていた。

「……貴方、なんで生きてるの?..」

「んー、神様に転生させられてね。第一の人生満喫中」

「もうじゃない」

「俺は俺のために生きてる」

そう答えると、女の子は俯いてフラフラと俺の周りを歩き回り始めた。

何がしたいのかわからないんですけど?

「……結局自分のためなのね」

「そうだよ?例えばあの人と一緒にいたいから悪いものや引き離すものから守る、そして生きる。人間でいたいから、人間としての最低限のマナー やルールを守る、そして生きる」

「……最終的に、自分のしたいこと=何かを守り、生きるってこと

？」

「うー、まだわかんないや。でも結局自分の願いなんだよね。誰かと一緒にいたいとかってさ、だから自分のため」

「……ふーん。馬鹿な上に変な人」

「ありがとう。で、そろそろ戻りたいんだけど」

「……今日はほんのくんでいいわ。またね（・・・）」

…………り…………み…………ど…………

「みどりー！」

「ひやーーー！」

ものすごい嫌な予感と共に意識が戻ると、目の前に拳が迫っていた。顔を横に傾けてなんとかかわすと、今度はアッパーが来た。かわせそうになかったので受け止める。

「ああ、よかつた。気がついたのね」

「その起こし方はいろいろまずいからね！」

「立つたまま動かなくなつたあんたが悪い」

「このミニマム娘め、いつか仕返ししてやる！  
ゴキブリのおもちゃでな！フハハハハ

「まあISを動かせることはわかつた。これで3人と1人か……」

「何の数？」

男でISを動かせるのは俺と一夏とてつちゃんの3人、あと1人が  
わからないんだけど。

もしかしたら俺の思つてることとは違つことかもしれない。

「受験無しで、IS学園に入学する人数だ。それで君の名前は？」

「あつ、あたしは高橋美佳です」

「みどり、一夏、佐久間、高橋の4人はIS学園に入学だ」

「…………はあ」

「えつ？待つてあたし明日受験……」

「それは私が話を通しておく。HIS学園の制服なども用意しておる」

「…………えええ……」

「あ、わかりました」

「それでは今田は解散

「これからめんどくさいこと田々が始まります。  
ヘルプマーです。

2 「わざわざあぶつー♪」（後書き）

「ねえ、みーくさんでやつぱつすいこね

「こきなつじうしたんだ?」東

「こきなつじエリの人格とロボット化ケーションといったんだよ。」「一  
なあーすじこなあーすーちゃん、このヒロイのニア賞うね

「……はあ、わかった。私が上元話を通しておへ

「あつがと一變じてゐよかーちゃんー。(待つてねー。すいこ)の作  
つ(り)かうちあひ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9262z/>

---

馬鹿ですが何か？

2012年1月5日21時45分発行